

氏 名 やまむら ながはら じゅん こ
山村(永原)順子
学位(専攻分野) 博 士 (人間・環境学)
学位記番号 人 博 第 382 号
学位授与の日付 平成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻 人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目 能における物狂の研究
——宗教学的見地から——

論文調査委員 (主査) 教授 西山良平 教授 カール・ベッカー 准教授 島崎 健

論 文 内 容 の 要 旨

本学位申請論文は能を宗教学的に考察し、能を物狂の観点から把握しようとするものである。能には何ものかにとりつかれた人々がシテ(主人公)としてしばしば登場するが、彼らは物狂と呼ばれ、その曲も物狂能と分類されている。能の大成者である世阿弥は物狂を「此道の第一の面白づくの芸能」と評しているが、物狂の能は「思ひ故の物狂」と「憑き物の物狂」に大別されている。「思ひ故の物狂」ではシテが肉親との別れによる悲しみなどから正気を失うが、「憑き物の物狂」は霊などがシテに憑いた状態を表わしている。従来は「思ひ故の物狂」が研究の中心で、「憑き物の物狂」はあまり取り上げられず、また「思ひ故の物狂」の研究も曲ごとの作品分析が多かった。本論文はこのような現状に対して、新たに宗教学的見地から「憑き物の物狂」を分析し、能全般に物狂が広く浸透することを主張する。

序章「物狂研究の現状と課題」では、従来の物狂研究の内容を検討し、本論文の課題を設定する。これまで、物狂の研究は日本文学における作品・テキスト研究が中心で、曲ごとの変遷や分類などを精緻に行ってきた。また、芸能史・日本史や精神医学・心理学の分野でも、物狂と芸能や社会との関わりが検討されてきた。このように物狂のテキストや芸能・社会との関わりは解明されたが、物狂そのものの仕組みや構造はほとんど分析されることがなかった。そこで本論文では、物狂の仕組みを把握するため、物狂の表現方法である舞や採り物(手にもつ道具)などの演出を取り上げ、能と「憑き物」との関係を経典学的な見地から課題とするのである。今まで、物狂を特徴づける演出方法が本格的に検討されることはなかった。

第1章「物狂再考」では、第一に、物狂のうち「憑き物の物狂」の重要性をあらためて主張する。世阿弥自身が「憑き物の物狂」より「思ひ故の物狂」を重視したこともあり、従来「憑き物の物狂」はあまり研究がなされなかった。しかし、「思ひ故の物狂」でも、「桜川」の桜や「班女」の扇など、曲中の具体的な物質を通して、「思ひ」が憑くのであって、「憑き物の物狂」こそ物狂全体の理解に至る鍵であると考えられる。第二に、「修羅の能」には修羅道に堕ちた武士が苦しむ様が描かれるが、そこには狂女物でよく見られる「カケリ」という働事(舞)がしばしば舞われるなど、「修羅の能」と物狂には共通性がある。すなわち、「憑き物の物狂」の要素が「修羅の能」に吸収され、重要な役目を果たしており、物狂以外の能にも物狂の要素が浸透すると論じる。

第2章「物狂の演出」では、「憑き物の物狂」などを構成要素に分解し、能の作品・テキスト研究では十分に解明されることがなかった舞など演出方法を分析する。第一に、シテの感情が言葉以外で表現される舞の部分に注目し、カケリと神楽を取り上げ検討する。カケリは武士の霊や物狂などが興奮状態で動き回る働事で、型・囃子とも急激にテンポが変化する。カケリは激しい感情を表わすことができ、物狂のほかに様々な曲で、シテの抱く情念を描き出す。一方、神楽は神懸かりとなった巫女などが舞うもので、神が人間に降りる点で「憑き物の物狂」と仕組みが同じである。神楽は舞台上で「神が降りる」現象を再現し、人間と神を接近させ、両者の境界を曖昧にする。第二に、能には物着(ものぎ)という演出があり、舞台上で装束を着替えたり、冠や烏帽子などを着けたりする。物着をきっかけに物狂となったり、武士が戦いの出で立ちとなるなど、シテの感情が転換する。実際の物質であるモノを身に着けることで何かをシテに憑依させ、物狂以外の曲でも舞台が転換する

象徴の役割を果たすようになった。すなわち、カケリ・神楽や物着の演出方法には憑依という共通性があり、「憑き物の物狂」の要素は多様化しつつ広く能全般に浸透していったのである。このように、憑依という考え方は物狂や能全般にとって重要である。

第3章「能の構造と憑依」では、主として能における憑依の独自性や具体的な現われ方を考察する。物狂やそこから派生した曲では、その曲を演じる時間内に限られるが、シテが「もの」に憑かれて正気を失う点では、シテの物狂は宗教的な憑依とみなすことができる。「もの」は「憑き物の物狂」では靈魂をさすが、「思ひ故の物狂」ではこれと異なる。人間の感情が、曲中の装束や冠など、実際の物質としてのモノに託され、このモノに託された人間の感情をさすのである。物狂ひいてはさらに広く能について、外界の靈的存在である「もの」の関与の様態が明らかにされている。のみならず、物質としてのモノに人間の感情が託される物狂の契機についても考察されている。鐘の音をきっかけに登場人物が物狂となるなど、鐘と物狂との深いつながりがその一例である。

以上のように本論文は、舞台のシテには「もの」やモノの憑依が集約されており、シテが神・靈魂・鬼などの「もの」や、モノに託された感情を体現する。能は「もの」やモノをシテの形で舞台上に登場させ、名前を付け存分に語らせて、異界を可視化する。すなわち、能の世界の基底には物狂の要素が生き続けていると結論する。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は、日本文化の代表の一つである能を宗教学的観点から取り上げ、能の中に物狂の要素が広くかつ深く浸透することを主張したものである。

能の物狂はその素材の興味深さから多彩な学問分野の素材とされ、日本文学作品・テキスト研究を中心に、芸能史・日本史や精神医学・心理学などで検討されてきた。しかし、従来の物狂研究は物狂の構造それ自体を解明するには至らなかった。そこで、本論文は第一に、物狂の構造そのものを俎上に載せ、そのあり方を宗教学的に追究する。物狂は「思ひ故の物狂」と「憑き物の物狂」に大別されるが、そのうち、「憑き物の物狂」は憑依という宗教的な現象であり、本論文の宗教学的分析はきわめて適切である。

本論文は第二に、今まで十分に評価されることがなかった「憑き物の物狂」と、いままで物狂と認識されなかった「物狂的なもの」を分析する。物狂の中では、世阿弥が「思ひ故の物狂」を好んで多数作曲し、現在でもそれが人気曲となっている。そのため、物狂研究では、「思ひ故の物狂」に重点があった。一方、「憑き物の物狂」は演出方法に際立った特徴があるが、その点の分析が等閑視されてきた。「憑き物の物狂」は宗教学的な分析に好個の素材であり、「憑き物の物狂」から「思ひ故の物狂」を見直すことが可能である。このような考えによって、本論文は「憑き物の物狂」から物狂さらに能全般を検討し、能に物狂の要素が深く浸透していることを解明した。

第三に、本論文は具体的な分析の対象として能の曲ではなく、物狂を要素に分解し、舞や採り物など演出方法に着目する。従来の物狂研究は作品研究が中心となっており、まず物狂とされる能の曲ありきで、物狂の内容や構造に言及した研究は数少ない。それに対して、本論文は物狂の構造を明らかにするため、舞や採り物などの演出を取り上げ、物狂の表現方法を詳しく分析する。たとえば、カケリ・神楽といった舞の所作は「憑き物の物狂」と関連があり、物着という演出は装束を身につけることで憑依を象徴するが、これらを詳細に検討する。このように、本論文は能の演出方法を宗教学的に分析することで、「憑き物の物狂」の要素が「思ひ故の物狂」にも強く作用していることを明らかにした。その結果、「憑き物の物狂」の要素・演出方法が「思ひ故の物狂」や能全般に浸透していることを論じるのである。

本論文は第四に、能の演出方法を分析し、外界の靈的存在である「もの」や、曲中のモノに託された人間の感情に注目する。物狂の構造では、この「もの」やモノが中心であると指摘する。「もの」やモノの考察に宗教学的な視点を活用し、シテとその外部の「もの」などとの関わりに憑依の考え方を適用するのである。従来も、能におけるシテとワキとの関係を宗教学的に解釈し、神がかかる巫女とその託宣を聞くサニワ（靈を司る者）の關係に相当するとみなす見解があった。本論文は、この憑依の概念を用いて、物狂の構造を詳しく分析するのである。つまり、「憑き物の物狂」では神や靈魂など「もの」がシテに憑依し、「思ひ故の物狂」では、装束や採り物など、モノに託された人間の感情がシテに取り憑いていく。物狂の構造は、「もの」やモノがシテに憑いて狂うのである。また、同じ物狂でも、「憑き物の物狂」と「思ひ故の物狂」では、憑依

のあり方に共通点と差異があることを解明した。「憑き物の物狂」の構造が「思ひ故の物狂」に強く反映し、さらに能全般に浸透するのである。

物狂は、つかみどころのない「もの」と対峙してきた人の歴史の中で、能が得た一つの答えと論じるのである。

本論文は物狂を取り上げ、「憑き物の物狂」を中心に、その演出方法を宗教学的に分析したもので、その点に大きな価値がある。また、物狂にとどまらず、能全般について「憑き物の物狂」の要素の影響を指摘した。演出方法の有効性と限界、また流派ごとの差異などが課題に残されているが、本論文の分析方法や結論は従来にない独創的なもので、その価値を減じるものではない。以上のように、本学位申請論文は、日本文化の総合的な研究をめざして創設された文化・地域環境学専攻日本文化環境論講座にふさわしい内容を備えたものと言える。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成19年5月10日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。